

みなさんは、『漂流老人ホームレス社会』という本を知っているでしょうか。おそらく知らない人がほとんどでしょう。この本は精神科医で、ホームレス支援のボランティア活動を大学生の頃から続けている森川すいめいさんという方が書きました。森川さんがずっとボランティア活動をしていて感じたホームレス達の現状が書かれています。私は父親に勧められて読み始めたのがホームレスについて知るきっかけでした。そこで、今回の感話はホームレス問題について書こうと思います。

『漂流老人ホームレス社会』を読み進めていくうちに驚いたこと、はじめて知ったことはいくつもありましたが、一番驚いたのは、ホームレスになってしまったのは努力不足が原因ではない場合が多いということでした。これまで私は、ホームレスは頑張ろうとしないからなるのだと心の底で決めつけていました。しかし、一つ大きな不幸が起これば自分や知り合いがホームレスになる可能性もあるのだと気づかされたのです。必死に働いているにもかかわらず低賃金のためにホームレスとなった人、障がいや病気を抱えているため職に就けない人もいます。これは別の世界の関係ない話ではなく、自分の生活のすぐそばで起きていることです。

多くのホームレスの方々は、生まれ育った家庭が貧困で、授業料や教材費が払えないなどの問題からまともに教育を受けられなかった人達です。教育を受けられなかったり学歴が低かったりしたせいで安定した仕事に就職出来ず、結果ホームレスとなってしまうのです。家やお金がなければ求人情報にたどり着くことも出来ず、また生活保護を受けたとしても税金を浪費しているという罪悪感からうつ病になることも多いと聞きます。ホームレス問題はお金をホームレスに渡せばそれで解決するような単純な問題ではないのです。それではどうすれば解決に少しでも近づけるでしょうか。

今回、この感話を書くにあたって、ボランティア活動について調べるうちに、川口加奈さんという方を知りました。川口さんは14歳の時に地元のホームレスについて興味を持ち、ボランティア活動を経て大学でNPO法人を立ち上げ、現在に至るまでホームレスの方達が社会復帰できるように活動されています。川口さんの考えの中で私が驚くと共に共感できたのがホームレスを支援してあげる側と支援されるだけの側という上下関係を作らないということでした。ホームレスはただ支援されるだけの存在ではなく、一人の人間として社会を支えられるようになるべきだという意味です。ホームレスの方が売っている商品だから買ってあげようというだけでは寄付や募金と変わりはなく、ホームレスの自立につながりません。

働く人がホームレスであることは関係なく買ってもらえる、社会に必要なモノづくりをホームレスの方ができる。そういった働く場所を作ることで川口さんはホームレスの方達が社会で自由に生きる、本当の意味での自立を支えているのです。川口さんは、支援しているホームレスの人達とは友達みたいな対等な関係だと言います。それを聞いて驚いてしまった私は、ボランティアとは上から「してあげる」ものだという傲慢な考えを持っていたのかもしれない。

ホームレスについて調べ、この感話を書いていて強く思ったことが一つあります。それは、「ホームレス」というカテゴリーの前にまず私達と同じ人間であるのだということです。当たり前のことのはずですが、私達は「支援してあげなければいけないかわいそうな人達」というようなレッテルをはってしまいがちです。支援という言葉が、助けてあげる側と助けられる側に人を分けてしまうせいなのかもしれません。

自分が助けられて生きているから自分も誰かを助けようという単純な理屈でボランティアをしてもいいのだと思います。相手が友人でもホームレスでも障がい者でも自然と助けあえるようになりたいです。